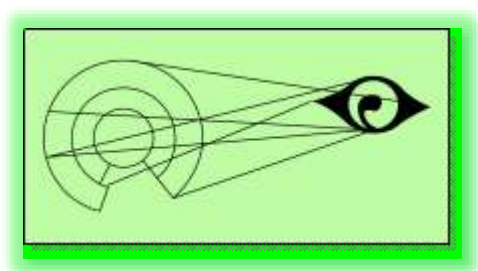


平成25年度北海道教育研究所連盟

共同研究集録



北海道教育研究所連盟
共同研究推進委員会



目 次

1	はじめに 第14次共同研究の概要について	2
2	第14次共同研究のまとめ	2
3	平成25年度共同研究の方向性	4
4	研究発表大会	6
5	共同研究の取組内容	14
6	今後に向けて	19

資料1	平成25年度第68回北海道教育研究所連盟研究発表大会 (釧路大会) 部会一覧	21
資料2	部会発表資料	22
資料3	大会役員一覧	28

【平成25年度の北海道教育研究所連盟共同研究について】

北海道教育研究所連盟では、第14次共同研究を平成22年度から平成24年度の3年間として研究を進めました。全国教育研究所連盟は、平成25年度を次年度（平成26年度）の研究テーマを決定するための猶予期間としました。

そこで、当連盟の本年度の共同研究については、全国の動きに合わせる形で、これまで進めてきた第14次共同研究を継続し、内容の一層の充実を図ることが4月の総会で承認されました。

平成25年度北海道教育研究所連盟共同研究について

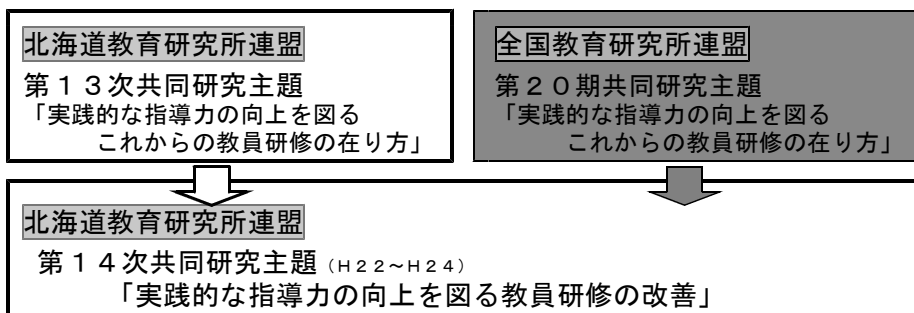
1 はじめに

第14次共同研究の概要について

○ 第14次共同研究

第14次共同研究は、当連盟の第13次共同研究の成果と課題を踏まえるとともに、全国教育研究所連盟（以下：全教連）第20期共同研究の研究主題「実践的な指導力の向上を図るこれからの教員研修の在り方」を考慮し平成22年度から3年間研究を進めた。

この共同研究では、各教育研究所・研修センターが実施する研修事業や各学校への研修・研究支援を充実させることで、教員の資質能力の向上に資することを目指した。



2 第14次共同研究のまとめ

○ 校内研究・研修の活性化

共同研究推進委員会では、「チェックシート（取組指標・成果指標）」の分析・整理を行うとともに、国立教育政策研究所の研究成果、先進的な取組を実施している教育研究所・研修センターの取組、校内研修を活性化させる小・中学校の実践事例について、毎年開催している当連盟の研究発表大会や連盟のWebページ等で情報発信し普及に努めてきた。

研究主題の「教員研修の改善」について、各教育研究所・研修センターや各学校の取組を調査しまとめた。

① 各教育研究所・研修センター

チェックシートの分析結果、加盟機関への聞き取り調査の分析、先進的な事例の分析を基にして校内研修の活性化等を図る上でのポイントを次のようにまとめた。

各教育研究所・研修センター	○ 各教育研究所・研修センターの所員が、域内の学校の校内研修に複数回参加し、共同で研究を進め具体的な支援をする。 ○ アンケート調査等を実施し、学校の教育課題や教育研究所・研修センターへのニーズを的確に把握し、研究・研修事業の工夫・改善に反映させる。 ○ 各教育研究所・研修センター間の連携、他機関との協力体制を強化することにより、専門性の向上や最新の情報の収集に努め域内に提供する。
---------------	--

1つ目は、各教育研究所・研修センターの所員が、同じ学校の校内研修に複数回参加することである。

授業づくりについては、学習指導案の作成段階から関わっていくことにより、教科や単元の目標を実現させるために、目標の明確化や指導方法の工夫、指導と評価を関連付けた授業を行うことができる。このよう

な繰り返し、授業力の向上につながる。

2つ目は、今日的な教育課題や学校及び教員のニーズをアンケート調査等で把握し、ニーズを生かし効果的な研修事業を展開することである。

3つ目は、学習指導案や研修講座の資料等をWebページ等を活用しながら情報提供することである。

Webページで、各教科ごとに実践事例や学習指導案、教材例を提示することにより、「いつでも」「どこでも」必要に応じて情報を得ることが容易になる。また、Webページに閲覧カウンターを付ける等により、情報の利用状況等を把握することができ、今後の掲載情報に関わるニーズの把握に役立てることができる。

② 各学校

各学校

- 意図的、計画的に研修の工夫・改善を図る。
- コミュニケーションを活性化する研修を意図的・計画的に設定する。
- 校内研究について複数回検証を行う。

1つ目は、校内研究及び研究内容を共通理解できるようにすることやそのための合意形成を図るプロセスを工夫することにより、全教員が主体的に参加できるようにしていくことである。

学校教育目標の具現化に向け、教員一人一人が「どのような取組をいつまで行うのか」「研究成果をどのように確認するのか」など、具体的な研究の内容と方法、進め方について「見える化」（可視化）を図っていくことが大切である。

2つ目は、参画意識を高め研修内容の理解を促進させることをねらいとした教員同士のコミュニケーション活動を重視し、研修形態を工夫するなど、話し合いや意見交流を活性化させるための意図的、計画的な工夫を進めていくことである。

例えば、校内研修における協議の場面にワークショップ型の手法を取り入れることが考えられる。このように形態を工夫することにより、経験年数が少ない教員でも自らの思いや考えを表現する機会できる。若手教員以外の教員も先輩教員の意見を聞きながら自分の指導方法等を振り返ることができるように工夫するなど、コミュニケーションを活性化することが重要である。

3つ目は、目指す子ども像の実現に向け、継続的に研究授業に取り組み、その都度、校内研究の在り方、成果と課題を検証することである。

各学校で実施されている学校評価と関連付けるなどして、PDCAサイクルに基づく校内研究を実施するなど、学校の実態に応じて工夫・改善を図っていくことが重要である。

③ 総括

共同研究推進委員会は、平成22年度からチェックシート（取組指標、成果指標）の作成、調査の実施と分析を行うとともに、研究協力校の先行事例の収集と検証、インタビュー・データの蓄積、成果の普及・還元の在り方について研究を進めた。

総括の視点として、教育研究所・研修センターからの「外的な支援」と学校としての取組である「内的な支援」とで、以下のようにまとめた。

- 各教育研究所・研修センターが、各学校と連携し校内研究の活性化

や研究内容・方法の充実及び授業改善に資する支援を行うことにより、教員の実践的な指導力の向上を図ることができる。

- 各学校での取組の成果と課題を、研究事業・研修事業の改善・充実に生かすことにより、教員の資質能力の向上に資することができる。

④ 成果

第14次共同研究における成果を教育研究所・研修センターからの「外的な支援」、学校としての取組を「内的な支援」として以下のようにまとめた。

【外的な支援】

- 授業者と教育研究所・研修センターの所員が、支援対象とする学校と共同で学習指導案を作成し、授業後の検討会にも参加することで、校内研究の進め方や授業改善の視点を明確にすることができた。
- 事前のアンケート調査等により、学校の教育課題や教員のニーズを的確に把握し、研究・研修事業の工夫・改善に反映させた。

【内的な支援】

- 日常的に児童生徒による授業評価を実施し授業改善の視点を明らかにしたり、授業評価を数値化したりすることにより、児童生徒の変容を客観的に把握できるようになった。
- 「複数回検証授業を実施している学校は、児童生徒の学力が高い」など、国立教育政策研究所の研究成果の紹介、ワークショップ型の研修手法の活用について研修を実施し、目指す子ども像の実現に向けて検証授業を複数回実施したことで研究協議が活発になり、研究内容の共有化が図られ教員の授業改善への意欲が向上した。

⑤ 課題

主な課題としては、次の2点が明らかとなった。

- 教員の実践的な指導力の向上や取組の評価が、学校の管理職や各教育研究所・研修センター所員・研究員の観察や事後アンケートの集計など、印象的な評価に止まっており新たな改善につながりにくい。
- 教員の実践的な指導力、資質能力の向上をどのような観点で見取るのか、明確な観点を示すことが十分ではなかった。

3 平成25年度共同研究の方向性

これまで、当連盟の共同研究は、全教連の共同研究を踏まえて取組を進めてきた。

全教連は、平成25年度を、次年度（平成26年度）の研究テーマを決定するための猶予期間としたことから、当連盟としてもそれに合わせる形で、これまで進めてきた第14次の共同研究を継続し、一層の充実を図ることが4月の総会で承認された。

そこで、平成25年度の研究主題を「実践的な指導力の向上を図る教員研修の充実」として、第15次共同研究の策定に向けた取組を進めることとした。

平成25年度の共同研究において重点として取り組むことは、第14次研究の成果と課題を踏まえ次の2点とすることとした。

「教員の実践的指導力の向上」

教員の実践的な指導力の向上に向けて取り組んできたこれまでの共同研究の成果を生かしつつ、研究内容を一層充実させていく。

「開かれた教育研究所・研修センター」

各教育研究所・研修センターは、広域な北海道の教育情報センターとしての役割を担うために、そのネットワークを活用していくシステムを整備していく。

これまでの共同研究では、調査を基にした各加盟機関や各学校の実態把握などに取り組んできたが、本年度の共同研究推進委員会では、共同研究が各加盟機関が実施する研修事業や域内の各学校に対する具体的な研究支援に資するものとなるよう内容面についても協議を重ねた。

教員が高めるべき実践的指導力に係わっては、とりわけ授業実践に関わり加盟機関の多くが取り組んでいる、「思考力・判断力・表現力等の育成」に焦点化し、育む思考力の具体化、言語活動の充実や指導した結果を見取る評価について研究することとした。

このようなことから研究内容の1点目は、「教員の実践的な指導力の向上」とした。（【図1】参照）

特に、学習指導や授業改善に関わる視点から、思考力・判断力・表現力等を育む指導の在り方と第14次共同研究で課題としてあげられた「指導の成果を見取る評価」の検証について研究を進めた。

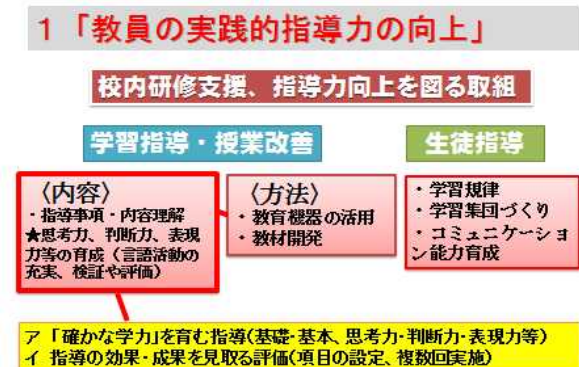
研究成果の普及については、研究集録としてまとめること、加盟機関が実施する研修事業と関連させることその他、共同研究推進委員会を中心として各加盟機関の所員・研究員が公開授業を行う際に、共同研究の視点を意識して実践を進めることや、公開授業を参観する際の視点とすることで所属している学校全体の「教員の実践的な指導力の向上」につなげていくことを考えた。

研究内容の2点目は、「開かれた教育研究所・研修センター」とした。（【図2】参照）

各教育研究所・研修センターの優れた取組を加盟機関が共有し、域内の学校支援や各加盟機関の取組の改善充実に生かすなど、全道各地域に普及・還元するための方策や情報発信に努めることである。

その他、各加盟機関が実施する教員研修の改善・充実に関わり、「若手

【図1】



【図2】



教員」「学校や地域の中核を担うミドルリーダー」の育成などの視点を踏まえた教員のライフステージに応じた研修事業の在り方についても実践事例を収集し、第15次共同研究の礎となるよう研究を進めることとした。

これまでの取組については、本稿14ページ以降の各教育研究所・研修センターの取組を参照いただきたい。

4 研究発表大会

平成25年9月5日（木）・6日（金）、釧路市生涯学習センター「まなぼとと幣舞」を会場として開催した本年度の第68回北海道教育研究所連盟研究発表大会（釧路大会）には、120名を超える関係者の参加があった。

① 1日目（9月5日（木））全体会

開会式に続いて、「教員の実践的指導力の向上」と「開かれた教育研究所・研修センター」を目指す平成25年度共同研究についての説明と中間報告を共同研究推進委員を代表し駒場秀剛委員長が行った。

その後の記念講演では、国立教育政策研究所初等中等教育研究部総括研究官藤原文雄氏に「教育研究所・研修センターが果たすべき役割」について御講演いただいた。

【記念講演概要】

昨年度から道内各地の学校を訪問しており、北海道の先生方の資質や能力の向上に関して、「充実や改善を図るポイントが見えてきた」こと、「教育研究所・研修センターと所員・研究員の役割は、他の県にはない制度である」ことなどを述べた。



〈実態・課題把握〉

所員・研究員に対しては、「各地域で先生方を支援するためには、実態把握が必要である」こと、「教員は誇りある仕事であり、課題とともに先生方のやりがいや誇りとしていることも把握することが大切である」ことを述べた。

〈関係機関の役割〉

「各教育研究所・研修センターは、それぞれ担当地域は異なるが、現場の先生方のニーズを把握し、必要な支援や指導を行い道立教育研究所との接点・パイプ役になることは共通であり、大切なことである」ことを述べた。

今回、初めて研究発表を行った教員養成系大学との連携、大学の役割については、「現場の先生方には、毎日、毎時間行っている授業について、何が目的で、何が価値あることなのかを考えながら指導している先生と、授業をこなしている先生の二つのタイプがある」こと、「学校では、根拠よりも即効性が求められるため、大学はそのよさを生かし、現場の先生方が普段考えない根拠やエビデンスを提供できることが強みである」ことを述べた。

〈北海道の課題〉

1 単発主義

藤原総括研究官は、運動会や学芸会などの行事に多くの時間と労力を費やしていること、行事と他の教育活動との関連性が薄く、単独で行われていることが北海道の課題であり、これを「単発主

義」と定義した。

また、「地域に根ざした北海道の学校は、国が提唱する前からコミュニティ・スクールである」「北海道の歴史として、地域を開墾・開拓し、次世代を担う人材、地域に生きる子どもたちを育ててきた歴史がある」としながらも、課題解決のためには、行事や総合的な学習の時間を日々の学習指導や他の教育活動と関連付け、様々な教育活動を通して実践的な力を付けていけるようにすることが重要である。そのためには「先生が子どもたちの身に付けた知識や技能を生かす活動や場を設定すること、子どもたちが学んだことをつなげる意識をもつことが重要である」とした。



2 連携・組織的な取組

次に、藤原総括研究官は、「北海道の先生は、自治的能力が優れているが互いの授業について口を出さない」傾向が強いことを課題としてあげ、「宿題やノート指導、学習のきまりに関する指導は、先生方の連携や学校全体での組織的な取組が欠かせない」と述べた。



そして、「単発主義」を改善するためには中・長期的な見通しをもつことが重要であるとした。

ある中学校では、第1学年主任が「1年後だけではなく、3年後に生徒が卒業する時の姿をイメージして指導」した事例をあげ、このような長期的な展望をもつことにより、1つの指導がうまくいかなくても、次の機会に「こうしよう」と積極的に改善に当たることができる」と述べた。

〈校内研修・研究〉

「立派な紀要を作成することが研究の目的となっていないか」「各教育研究所・研修センターの取組が本当に学校の実践に役立つものとなっているか確認することが大切」と述べ、最後に「教育研究所・研修センターが北海道の学力向上と子どもたちの未来のために頑張してほしい」と参会者へのエールで講演を結んだ。

② 2日目（9月6日（金））部会

2日目は、参加者が「授業改善」「校内研修」「教員研修」のテーマ別に分かれ実践発表と協議を行った。

各部会では、加盟機関による2本の実践発表（実践発表については、8頁及び22頁以降を参照）と、小グループでの「部会」テーマに基づいたワークショップ型の研究協議を行い、日頃の各教育研究所・研修センターの取組を交流するなど、教育研究所・研修センターの取組の改善・充実に向けた貴重な機会となった。

○ 第1部会「授業改善」

(1) 研究発表1 ◆石狩教育研修センター

石狩教育研修センターは、指導の効果を高める手立てとしてのICT機器の特性の理解や教材・教具の有効で効果的な活用を目指した、「授業におけるICT活用に関する実態調査」や「ICTを活用した授業研究」を行い、各学校への「実践事例の紹介と研究成果の現場への環流」を進めている。



初めに澤口指導員から研究の概要、学習活動へのICTの取り入れ方、研究協力校における実践、平成24年度から平成25年度の本研究の取組、管内の実践事例を発表した。

続いて、赤井指導員から、管内の小学校及び中学校に対して実施したICT活用に関するアンケート調査結果から、小・中学校では、パソコン、デジタルカメラ、プロジェクター、実物投影機の使用頻度が高いこと、電子黒板の使用率などについて発表し、その後、本実践を連携している北海道教育大学学校・地域教育研究支援センターの花輪先生が、大学と地域連携のモデルケースとしての位置付けで本研究を進めていることや、当該研修センターとの連携、研究内容に関連して先進的な取組を進めている東京新宿区などの実践について発表した。

(2) 研究発表2 ◆釧路教育研究所

釧路教育研究所は、子どもが課題を追究する中で、自ら考える活動を繰り返しながら思考力を培うことを目指し、「単元構成の工夫」、「学習展開の工夫」についての研究を進めている。



小川研究所員は、思考力の育成に焦点化して研究を進めていること、身に付けさせるべき知識や技能、既習内容・事項、児童生徒の思考の流れをまとめた「学びの地図」を作成していること、発達段階や教科の特性を考慮した言語活動を取り入れた問題解決的な学習を設定していることなどについて発表した。

「学びの地図」の活用については、児童生徒に身に付けさせるべき資質や能力を明らかにするとともに、一枚のシートに明示することで、指導に当たる教員が共通理解を図ることができると発表した。

また、「学びの地図」に関連して、導入での見通しをもたせる活動と、終末での振り返る活動を意識して授業を構成していると発表した。そして、国語科においては、順序や比較など、理科では、比較、関連付け、推論などといった各教科における「思考する姿」を具体的に整理し、児童生徒がよりよく思考できるようにするための手立てについて発表した。

(3) 研究協議

「授業改善」部会では、グループごとに課題の洗い出し、洗い出した課題に対する解決策、改善策を考える活動を行った。

加盟機関が一堂に会する年1回の貴重な機会であり、参加者は、各教育研究所・研修センターの取組の交流なども交えながら協議は活発に行われた。

各教育研究所・研修センターの取組としては、授業実践に関わる調査、若手教員向け模擬授業の実施、リーフレット作成、学習評価を重視した取組などが紹介された。

一方課題としては、教育研究所・研修センターの活動に多くの教員が参加していないこと、活動について周知を図る機会や場面が少ないこと、研究や協議の時間確保が難しいことなどがあげられた。

解決を目指す取組としては、実際に各学校に所員・研究員が出向く機会を多くすること、ミドルリーダーに働きかけるなどして学校全体で取り組めるようにすること、ニーズを把握し必要感のある内容やテーマについて研究を進めることなどが出された。

協議を通して、参加した所員・研究員は、授業改善に向けて各研究所で取り組まなければならないことを確認し、実践に対する意欲を高めていた。



(4) 助言者から 渡島教育研究所 細川 敬太郎 所長

「授業改善」に向け、各教育研究所・研修センターには、センター的機能を生かした取組が求められている。

一つは、学校運営という視点から組織全体に働きかけることが必要である。各研修事業の参加率をあげるためには、学校全体に働きかけ、参加できるようにすることが求められる。

また、学校にとって役立つ研修・取組となるようにするためには、学校が何を目標しているのか時間をかけて把握し、教育研究所・研修センターから具体案を提示することも大切である。

二つ目に、校内研究への関わり方については、校内研究の担当者だけで進めていないか確認することが重要である。

このように学校内で共通理解が図られていない場合は、所員・研究員が出向き、学校全体で校内研究に取り組むことができるように、研究の進め方やその具体的方策を例示することも求められる。

大切なのは、所員・研究員が積極的に学校に関わり、対象校の課題を把握し、学校とともに校内研究を進めていくことが重要である。

石狩教育研修センターは、各学校の多様なニーズに応じた研修支援を進めており、今後、目標の達成に向けて、学習過程のどの時間にICTを取り入れ活用するのかを考える必要がある。

釧路教育研究所のきめ細かく児童生徒を支援する視点は参考になるので、今後、学校への普及に取り組んでもらいたい。



○ 第2部会「校内研修」

(1) 研究発表1 ◆上川教育研修センター

上川教育研修センターは、学力の確実な育成を目指した指導と評価の在り方、指導計画、授業展開、学習評価の工夫などについての研究成果と、主に中堅層を対象とした校内研修を推進する力量の向上を図る「校内研修」講座、学校等のニーズに応える「出前講座」などの実践を発表した。



北川研究員と吉田指導員は、研修センターの研究主題「校内研修を支援する研究・研修事業～子どもの学習状況の評価を指導に生かすための研修の取組～」について研究事業と研修事業を進めていること、具体的には、授業計画、授業展開、学習評価を研究内容とし、研究員による授業研究等を進めていることについて発表した。

特に、校内研修支援については、「校内研修」講座と「出前講座」を実施しており、「校内研修」講座では校内研究に力を入れている学校の研究理論を理解した上で、公開授業を参観することで、当該学校の校内研究の取組について理解を深めるとともに、校内研究を推進する上での課題を理解できる交流の場を設定していることなどを紹介した。

「出前講座」については、学校のニーズに応じることができるように、項目を多く設定し、午後開催（14：30～16：00）、その中で講師が1時間程度演習を行っていることなどを紹介した。

(2) 研究発表2 ◆十勝教育研究所

十勝教育研究所は、習得した基礎的・基本的な知識・技能を活用して、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育むことを目指した、「学びを実感し伝え合う学習活動の工夫」「学びを改善するための評価と指導の工夫」について研究発表した。



辻主任所員は、学習活動の工夫と評価と指導の工夫について、実践例を交えながら発表した。

学習活動の工夫については、児童生徒に学びを実感させる工夫をテーマにして、児童生徒にとって身近な教材を取り入れることや体験的な学習を進めること、既習事項や既に体験したことを生かした学習活動の実践について発表した。

もう一つの工夫として、協同的な学び合いの工夫をあげ、話し合う活動を拡散的・収束的な話し合いの視点から行うことや、交流を高め合う・認め合うとした実践について紹介した。

指導と評価については、評価規準と評価場面の明確化と、指導に生かす的確で効率的な評価について発表した。児童生徒に示す評価規準として「3つ以上書けたら合格」など、児童生徒自身にも目標を意識させるようにし成果をあげた事例を紹介した。

(3) 研究協議

「校内研修」部会では、各教育研究所・研修センターが行っている校内研修の支援について交流するとともに、校内研修を支援する上での課題、校内研修自体の課題について、グループごとに話し合い、それらの解決策、改善策を考えた。



加盟機関が一堂に会する年1回の貴重な機会であり、参加者は、各教育研究所・研修センターの取組の交流なども交えながら協議は活発に行われた。

各教育研究所・研修センターの取組や工夫としては、小・中で連携していること、ガイドブックやリーフレットの作成、研修講座の実施、ICTの活用、授業後の研究協議の工夫などが出された。

一方、課題としては、校内研究と授業実践のつながりが薄いこと、単発で終わることが多いこと、ニーズの把握が難しいことなどがあげられた。

解決を目指す取組としては、研究担当者が集まり協議する場の設定、各学校の実践や成果を収集し他校に普及・啓発すること、実践者を普及員として活用すること、実践事例がどのように生かされているのかアンケート等による実態把握が必要であることなどが話し合われた。

協議を通して、参加した所員・研究員は、授業改善に向けて各教育研究所・研修センターで取り組まなければならないことを確認し、実践に対する意欲を高めた。

(4) 助言者から 稚内市教育研究所 高井徳廣 所長



「校内研修」を支援していく上で、教育研究所・研修センターが各学校と連携を図り、各学校の校内研修について把握していくことが大切である。

協議で話題となっていたように、各学校の研究担当者と所員・研究員が話し合う場を設定することが考えられる。

上川教育研修センターで行っている出前授業は、ニーズに応じて学ぶことができる貴重な機会である。また、校内研修講座を午前中から行い、教頭及び研究担当と協議する時間を設けている。継続性ある研究のためには全体を見渡す教頭の力を活用することが有効である。

十勝教育研究所は、基礎的・基本的な知識・技能を活用し、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成を目指した授業の在り方について紹介した。学習活動で行われる言語活動に2つの視点から迫り、更に2分類して実践していることが参考となった。研究主題に対して実践事例の紹介があったが、一つ一つの取組をつなげていくことが求められる。

校内研修の充実には、各教育研究所・研修センターと各学校が一体となり、組織的に取組を進めていくことが大事であり、関係者が一同に介する機会の設定も大切である。

○ 第3部会「教員研修」

(1) 研究発表1 ◆北海道教育大学 学校・地域教育研究支援センター へき地教育研究支援部門

北海道教育大学学校・地域教育研究支援センターへき地教育研究支援部門は、教員養成段階において、へき地小規模校に必要な教師の実践力を培うことを目指した、小学校や中学校と連携した「複式による指導」「少人数指導」「異学年交流」などの学習指導と、「教師と児童生徒との密接な信頼関係」「地域と連携した学校経営」などを実地で体験する取組を進めている。



1日目の国研藤原総括研究官から示唆があったように、採用後間もない若手教員の支援も教育研究所・研修センターの重要な役割であり、へき地・複式教育は重要であることが示された。

川前主任センター員と大路大学院生は、北海道教育大学教員養成課程における「へき地校体験実習」について発表した。

実際には、2年生で1週間の実習、3、4年生で2週間の実習を釧路・十勝・根室管内の小・中学校で実施した事例について紹介した。

実践力の向上に関わり、学校規模に関わらず個に応じた指導は基本となることであり、採用後の支援が課題としてあげられた。

(2) 研究発表2 ◆札幌市教育センター

札幌市教育センターにおけるミドルリーダー育成に向けた研修事業は、学校づくりに主体的に参画する意識や専門性、実践力を高めることを目指して実施しており、次のような成果について発表があった。



- ・「教職経験者研究協議会Ⅱ（15年経験者研修）」については、学校経営に参画することの重要性を感じ取る意識が高まっており、専門性や実践力、指導力の発揮につながった。
- ・「専門研修（中堅教員研修コース）」については、学校マネジメントに関わる諸問題への認識が高まった。また、教養事項に関わる知識・理解が深まった。
- ・「学校運営研修会」については、教育の今日的課題について理解をより深めるとともに、それらに対応する力を高めることをねらいに実施し、それぞれの地域の特徴を生かした学校経営の在り方に関する意識が高まった。
- ・「新任主幹教諭研修」については、校長や教頭の方針を理解し、学校運営に関わっていくことの大切さを認識したり、法的な位置付けを確認し、適切に職務を遂行することへの理解を深めたりすることができた。

受講者が、これらの成果を勤務校で生かすことで、研修成果が他の教員に波及し、学校全体の教育力の向上につながっていくことを目指していることが発表された。

(3) 研究協議

「教員研修」部会では、各教育研究所・研修センターが行っている教員研修について交流するとともに、教員のライフステージに応じた研修の在り方について協議した。



参加機関の全てが研修事業を実施しているわけではないが、教員のニーズに応じた支援を行っている点は共通であり、参加者は、各教育研究所・研修センターの取組の交流なども交えながら協議は活発に行われた。

前半の協議では、ライフステージを意識した研修事業を設定している教育研究所・研修センターについて交流が行われ、札幌市教育センター、江別市教育研究所、空知教育センターの取組が紹介された。

協議の後半は、受講者のニーズの把握、講座設定のプロセス、参加者の確保、成果の発信や普及、参加率を向上させる手立てについて話し合った。ニーズの把握についてはアンケート調査に年齢や教員経験年数を記載する欄を設けること、講座運営については講師の人選や研修日の設定、市町村教育委員会との連携の在り方などについて話し合われた。

多くの教育研究所・研修センターで課題となっている研修事業への参加者確保については、管理職への働きかけの方法や参加しやすいように同内容の講座を複数回開設するなどのアイディアが出された。

(4) 助言者から 空知教育センター 高瀬 裕二 所長



地域の中心に学校があり、教員が誠意をもって地域に根ざした教育を行う意識を育てることが大切である。教育研究所・研修センターと大学などの関係機関、地域住民と連携しながら未来の教師を育てることが求められる。

「教員研修」を考える上では、今後、期限付き教員に対する研修についても含めて考えなければならない。

効果的に教員の資質能力の向上を図る上では、ポイントを絞り、ライフステージに応じた研修を実施することが必要となる。

一度受講して終了ではなく、5年後、10年後といった、長いスパンを見通して、先生方を支援していくことが大切であり、そのためにも教育研究所・研修センターが各学校と連携を図り、各学校の校内研修について把握し、関わっていくことも必要である。

教育研究所・研修センターで研修事業を行う際には、開催要項の冒頭にライフステージという概念や、それに応じた講座を開設しているという趣旨をはっきりと伝える工夫が必要である。

多様なニーズに応じるために、民間教育団体等と連携、協力し、その際の事務局としての役割を教育研究所・研修センターが果たし、地域の教育力を生かした広がりのある研修計画を作成することが大切である。

5 共同研究の取組 内容

平成25年度の共同研究では、第14次共同研究を一層充実させ、取組を継続することとしたが、研究内容についても共同研究の対象とし、関連する各教育研究所・研修センターの実践事例を収集、普及・啓発に努めることとした。

次に示すのは、本年度の重点である「教員の実践的な指導力の向上」と「開かれた教育研究所・研修センター」を目指す取組に関わる実践事例の一部である。

I 「教員の実践的指導力の向上」を目指す取組

【各教育研究所・研修センターにおける取組】

1 「確かな学力」を育む指導

◆釧路教育研究所の実践

○ 各教科で育む思考力を明らかにした取組

釧路教育研究所では、国語科、社会科、算数・数学科、理科における児童生徒の「思考する姿」を具体化し、共同研究に取り組んでいる。

〈各教科における思考する姿〉から

教 科	論理関係	思考する姿
国 語 【話すこと・聞くこと】	順序	○相手や目的に応じて、理由や事例を挙げながら、話す事項を順序立てる思考の仕方。
		「伝えたいことを順序よく話すには、どうしたらいいかな？」 →『『まず』や『次に』などの順序を表す言葉をつかえばいいんだ。』
	比較	○相手の立場や考えを尊重し、目的に沿って話し合い、互いの考えの共通点や相違点を考える思考の仕方。
		○話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめる思考の仕方。
		「～くんは、そういうことが言いたいのか。ぼくとは筆者の言いたいことのとらえ方が違うな。でも、そのような見方をすると筆者の本当に伝えたいことが伝わってくるな。」
	類別	○考えたことや伝えたいことから話題を決め

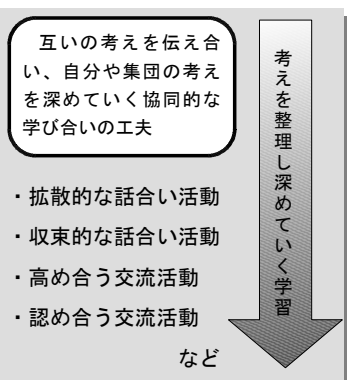
関連URL <http://www.k4.dion.ne.jp/~senken/kenkyuu/kenkyuu.html>

◆十勝教育研究所の実践

○ 自分や集団の考えを深める協同的な学び合いの工夫

十勝教育研究所では、自分や集団の考えを広げたり深めたりしていくために、多様な価値と出会い、思考がゆさぶられるような協同的な学び合いを工夫した。

多様な考えを知り、自分の考えを広げていく拡散的な話し合い活動や、考えをまとめていく収束的な話し合い活動、互いの良いところを見付け、自分や集団の考えを発展させていく



高め合う交流活動や、互いの考えを伝え合い、相手の考えを認め理解することで、自分の考えを確かなものにしていく認め合う交流活動などを取り入れた。

○ 収束的な話し合い活動

中学校第2学年数学科「平行と合同」

- ・個人で考えさせた後、グループによる話し合いで「考えを一般化させる学び合い」を設定した。

○ 認め合う交流活動

小学校第5学年国語科「効果的に発表しよう」

- ・発表の仕方や内容について他のグループの良いところと、自分たちのグループに取り入れたいアイディアにシールを貼る活動を取り入れた。

参照：研究紀要No. 207 7、29、38頁 十勝管内教育研究所連絡協議会、十勝教育研究所

2 指導の効果、成果を見取る評価

◆上川教育研修センターの実践

○ 目標の具体化及び1単位時間の目標との整合性、評価の工夫

上川教育研修センターでは、学力の確実な育成を目指し、実践研究に取り組んでおり、単元及び1単位時間の目標を学習活動との関連で具体化し、目標達成に向けた手立ての工夫とその達成状況を計画的に見取る工夫をした。

右図に示したように、「1 指導計画の工夫」では、「問題解決的な学習過程を基盤とした指導計画の工夫」、「目標の具体化及び評価規準との関連」、「目標と学習課題との関連」、「授業展開の工夫」において、「学習評価シートの活用」、「学習評価の工夫」では、「診断的評価、形成的評価、総括

的評価の工夫」に取り組み、学ぶ意欲、知識や技能、考え方などをバランスよく指導計画に位置付けることにより、指導内容を明確にした。

参照：研究紀要 第38号 12、14頁 上川教育研修センター

関連URL <http://kami-cen.hs.plala.or.jp/tayori/114.pdf>

研究の仮説 から

- ・1単位時間の目標を具体化し、指導計画に位置付ける。
- ・目標達成に向けた手立てを工夫し、その達成状況を計的に評価する。

目標・指導・評価の一体化

求める児童生徒像の実現

研究内容 から

1 指導計画の工夫

- ・問題解決的な学習過程を基盤とした指導計画の工夫
- ・目標の具体化及び評価規準との関連
- ・目標と学習課題との関連

2 授業展開の工夫

- ・発問、指示の工夫
- ・板書の工夫
- ・言語活動の設定
- ・学習評価シートの活用

3 学習評価の工夫

- ・診断的評価の工夫
- ・形成的評価の工夫
- ・総括的評価の工夫

◆十勝教育研究所の実践

○ 2回以上の評価場面の設定

十勝教育研究所では、考えを整理し深めていく学習を充実させるために、学習状況を捉え、学びを改善するための評価と指導を工夫した。

授業の中に、評価規準と評価場面を明確に位置付けることに加え、結果だけではなく、プロセスを含めて評価できるように、授業の中に2回以上の評価場面を設定した。

授業の中における、
評価規準と評価場面の
明確化

- ・学習目標に照らした
評価規準の設定
- ・授業の中における、
2回以上の評価場面
の設定

考えを整理し深めていく学習

【実践例から】

小学校第3学年社会科「はたらく人とわたしたちの暮らし」

〈1回目の評価〉ノートで評価する。

評価後の指導→考えに自信がもてるように、個々の考えを認める指導を行う。



〈2回目の評価〉発言・発表内容で評価する。

評価後の指導→考えの根拠が言えるように、掲示物を活用し、補助発問をする。



〈3回目の評価〉店長さんの作戦を考えることができたか、よかった発表についてなど自己評価と相互評価する。

参照：研究紀要No. 207 7、12頁 十勝管内教育研究所連絡協議会、十勝教育研究所

3 教員のライフステージに応じた研修事業の実践

◆空知教育センターの実践

○ 教員に求められる力、ニーズに応じた研修事業

空知教育センターでは、研究事業・情報事業とともに研修事業として「研修講座」を開催している。本年度は33講座を開設し、延べ500名以上の受講があった。

授業公開講座や技能講座のほか、「小規模・複式教育指導研究」、「幼保小の連携」、「国際理解」や「食に関する教育」など、今日的な課題に対応する講座を設定しているほか、「学校経営」「学級経営」「生徒指導」

「校内研修」「教育課程」など教職員経験年数や担当分掌業務を踏まえ、教職員のライフステージに応じた研修講座を設定している。

平成25年度開催の研修講座 から

教科指導に関わる研修講座

- ・社会科教育
- ・国語科教育
- ・算数・数学科教育
- ・技術科実技
- ・音楽科実技など

今日的な課題に対応する研修講座

- ・幼保小の連携
- ・国際理解
- ・食に関する教育など

教職員のライフステージに応じた研修講座

- ・学校経営
- ・学級経営
- ・生徒指導
- ・校内研修
- ・教育課程など

関連URL

<http://sorachi-ed.jp/index.php/training/kennsyuzigyougaiyou.html>

4 研修事業の工夫・改善

◆上川教育研修センターの実践

○ 校内研修の充実を支援する出前講座の開設

上川教育研修センターでは、各学校における「校内研修支援」にも研修事業部を中心に組み込んでおり、校内研修体制の確立を支援する「校内研修」講座、校内研修の充実を支援する出前講座、教員の資質能力向上につなげる研修講座を開設した。

とりわけ、学校等の関係機関のニーズに対応し、指導力の向上を図るための研修として「出前講座」を開設した。

本講座では、下図に示した内容について各学校に出向いて研修を進めた。

講師は、管内の専門的知識・実践的指導力を兼ね備えた教職員が務め、平成24年度は1団体272名に研修を実施し、本年度は、15団体から申し込みがあった。

校内研修の充実を支援する出前講座の開設

ねらい：学校等の関係機関のニーズに対応し、指導力の向上を図る。

従来は、生徒指導
小学校外国語活動

特別支援教育、ミニ講演会、
など

ＴＴ指導 学力向上 キャリア教育 ＩＣＴの活用
複式教育 板書の仕方 放課後学習 体育科実技
版画指導 絵画指導 書写指導

関連URL <http://kami-cen.hs.plala.or.jp/tayori/114.pdf>

本年度の重点の1点目である「教員の実践的な指導力の向上」に関わる成果と課題については、次のとおりである。

【成果】

- ・教員の実践的指導力の向上の一つの指標である「授業改善」に関わり、思考力・判断力・表現力等を育む指導、指導と評価の一体化、複数回評価の実施による児童生徒の変容の見取りに関する実践事例を収集できた。
- ・「授業改善」を促すための「校内研究」と「教員研修」との関連を夏季所員研修会や研究発表大会における各部会で、所員や研究員に対し、意識付けることができた。また、「校内研修」支援については、所員・研究員が積極的に学校、研究担当者に関わっていくことを確認できた。
- ・「教員研修」については、教員経験年数に応じて研修内容を設定するという改善・充実の視点を発信することができた。
- ・新たな取組として、教員養成系大学との連携の観点から共同研究推進委員として、北海道教育大学学校・地域教育研究支援センターへき地教育研究支援部門に加わっていただいた。北海道の広域性と関連するへき地・複式教育について、各教育研究所・研修センターの所員・研究員が、採用前段階の取組を理解できたことは、採用後間もない若手教員に対する研修についても視野に入れることができた。したがって、今後、各加盟機関が実施する研修事業を考える際にも大いに参考となった。

【課題】

- ・地域の実態や課題に応じた取組を含め、各加盟機関が学校改善を図るために工夫した取組や実践を今後も収集し、加盟機関及び道内の先生方が活用できるようにする必要がある。
- ・教職経験年数などを踏まえた、教員のライフステージに応じた研修事業の実施と、そのモデルづくりを進める必要がある。

- ・教員の実践的指導力の向上に向けて収集した各種資料を加盟団体に紹介し、普及・啓発を図っていく必要がある。

Ⅱ 「開かれた教育研究所・研修センター」を目指す取組

【各教育研究所・研修センターにおける取組】

1 取組評価、検証（複数回評価）の実践（※研修事業について）

◆後志教育研修センターの実践

○ 4つの視点から見た研修講座の改善

後志教育研修センターでは、管内教職員並びに社会教育指導者の資質向上のため研修講座事業を実施している。本年度も29講座を設置し、延べ605名の受講があった。

昨年度から、研修講座を「受講者の学校力UPにつながったと思われる点」「受講者の力量UPにつながったと思われる点」「連携力UPにつながったと思われる点」「講師力UPにつながったと思われる点」の4つの視点でアンケート内容を評価している。

また、アンケート結果についても、4つの視点ごとに出てきた内容を、成果と課題と要望、発憤の動機となったことに分けることで、講座の目的が達成されているかを検証した。（下表）

これを参考に次年度の研修講座を企画することで、講座に対する満足度も上がってきている。また、この結果について講師に知らせることで、以前にも増してアンケートの内容を意識した研修講座が構成されるようになっている。

平成25年度後志教育研修センター アンケート結果から見る研修講座改善点

◎…成果 △…課題 □…要望
☆…発憤の動機となったこと

受講者の学校力UPにつながったと思われる点

- ◎SWOTを自分のみではなく、学校全体で行う。（組織マネジメント 中学校30代）
- ◎高学年の担任だけでなく、学校全体で活かしていきたい。（小学校外国語活動 小学校40代）
- △同僚の先生方にもQ-U 検査を進め、役立てていきたい。（学級経営（2） 小学校20代）

受講者の力量UPにつながったと思われる点

- ☆“学級づくり6つのねらい”について学校に戻って見直してみたいと思います。（学級経営（2） 中学校20代）
- ◎課題把握、自力解決、交流、まとめと意識して授業づくりをすることが課題だったので、複式の授業を見ることができて良かった。（へき地複式教育 小学校30代）

連携力UPにつながったと思われる点

- ◎日頃思っている疑問を交流することができて良かったです。もう少し時間が欲しかったです。（国語科 中学校30代）
- ☆まずは、市内の幼稚園・保育所の交流を、うちの園発信でやってみます。（幼児教育 幼稚園30代）

講師力UPにつながったと思われる点

- ◎時間を区切ったワークショップ。その後、話し足りない人での事後研が続くなんて素晴らしいと思いました。（校内研修 中学校30代）
- 中学校の授業についても公開して欲しいと思いました。（国語科 中学校20代）

関連URL <http://www.shiribeshi-etc.jp/kouzatop/kouzatoppage.html>

2 各学校への資料提供の工夫

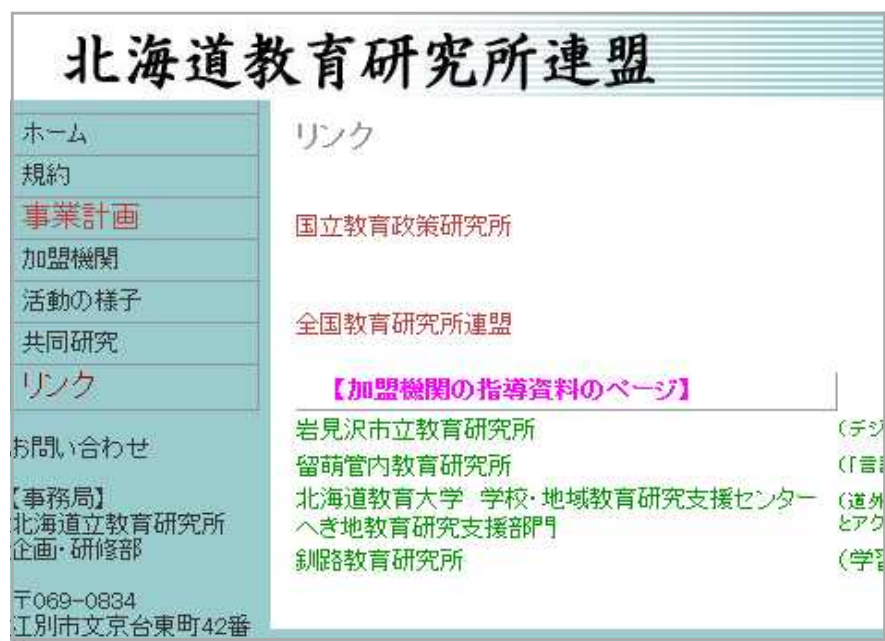
◆道研連事務局（道研）の取組

「若手教員の支援」に関連して、北海道教育研究所連盟Web「リンク」に「加盟機関の指導資料のページ」を作成した。

〔掲載教育研究所・研修センター〕

- ・岩見沢市立教育研究所

- ・留萌管内教育研究所
- ・北海道教育大学 学校・地域教育研究支援センターへき地教育研究支援部門
- ・釧路教育研究所 に協力いただいた。



該当Webページ http://www.doken.hokkaido-c.ed.jp/?page_id=83

本年度の重点の2点目である「開かれた教育研究所・研修センター」に関する成果と課題については、次のとおりである。

【成果】

- ・研修事業を実効性のあるものにするために、研修事業の評価を複数回実施し、検証に努める機関が増えた。(後志教育研修センター)
- ・4加盟機関の実践事例、学習指導案を連盟のWebページで共有できるようにした。

【課題】

- ・一層の事例収集と情報の共有を進める必要がある。
- ・収集した事例の活用、普及・啓発を進める必要がある。

6 今後に向けて

本年度は、全教連の動きと合わせて、第14次共同研究を継続し、更なる充実を目指す一年と位置付け、共同研究を進めてきた。

「実践的な指導力の向上を図る教員研修の充実」を研究主題として、「教員の実践的な指導力の向上」と「開かれた教育研究所・研修センター」の2つを実践・研究の観点として取り組み、教育研究に関わる方法面から、現場で指導される先生方の姿をイメージし、研究内容も含めた共同研究となるよう改善してきたところである。

そのような中、全教連は、平成25年8月1日付けで、平成26・27年度「全教連課題研究」の共通テーマ「教員の資質能力の向上を図る研修プログラムの開発に関する調査研究」を示した。

これまで道研連において進めてきた取組の方向性や視点が、全国の流れを踏まえても妥当なものであることを再確認するとともに、本連盟共同研究推進委員会では、第15次共同研究についても本年度の共同研究で取り上げた内容について一層研究を進めていくことを確認したところである。

今後も教員の実践的指導力の向上を目指し、各加盟機関における研修事業や校内研究支援の充実を図ることや、各加盟機関の取組交流、大学等の関係機関と連携を図るなど改善充実を進めていく。

【平成25年度共同研究推進委員会】

【委員名】

委員長	駒場 秀 剛	(後志教育研修センター研修部長)
副委員長	西岡 裕 英	(北海道立教育研究所企画・研修部研究研修主事)
委員	杉原 大 樹	(石狩教育研修センター指導員)
〃	乙丸 聡 史	(空知教育センター所員)
〃	青木 賢 二	(上川教育研修センター研究員)
〃	高橋 一 仁	(胆振教育研究所所員)
〃	阿部 昌 己	(十勝教育研究所所員)
〃	樋口 達 也	(釧路教育研究所所員)
〃	高橋 直 之	(札幌市教育センター研修担当課指導主事)
〃	篠原 寛 之	(岩見沢市立教育研究所所員)
〃	川前 あゆみ	(北海道教育大学 学校・地域教育研究支援センター へき地教育研究支援部門 主任センター員)
〃	大脇 明 子	(北海道立教育研究所企画・研修部研究研修主事)

【会 議】

- | | | |
|----------------|-----------|---|
| 第1回 | 5月10日(金) | <ul style="list-style-type: none"> ・共同研究推進委員会役員選出について ・平成25年度の共同研究について ・第68回北海道教育研究所連盟研究発表大会(釧路大会)について |
| 第2回 | 6月26日(水) | <ul style="list-style-type: none"> ・平成25年度全国教育研究所連盟総会の報告 ・平成25年度北海道教育研究所連盟共同研究について ・第68回北海道教育研究所連盟研究発表大会(釧路大会)について |
| 第3回 | 7月30日(火) | <ul style="list-style-type: none"> ・第68回北海道教育研究所連盟研究発表大会(釧路大会)について |
| 【夏季所員研修会と同日開催】 | | <ul style="list-style-type: none"> ・平成25年度北海道教育研究所連盟共同研究について |
| 第4回 | 9月 5日(木) | <ul style="list-style-type: none"> ・研究大会1日目:「全体発表」(共同研究推進委員長) |
| 【道研連研究大会運営】 | | <ul style="list-style-type: none"> ・ 〃 2日目:「部会」運営、研究発表 |
| 第5回 | 10月 2日(水) | <ul style="list-style-type: none"> ・平成25年度第68回北海道教育研究所連盟研究発表大会(釧路大会)の成果と課題について ・平成25年度共同研究について |
| 第6回 | 12月 6日(金) | <ul style="list-style-type: none"> ・集録作成 ・次年度以降の共同研究(第15次共同研究)について |
| 第7回 | 1月10日(金) | <ul style="list-style-type: none"> ・集録作成 ・次年度以降の共同研究(第15次共同研究)について |

資料 1 平成 25 年度第 68 回北海道教育研究所連盟研究発表大会（釧路大会）部会一覧

1 日程 平成 25 年 9 月 6 日（金）

9:20	9:55	10:30	10:45	12:20	12:30
研究発表 1 (35分)	研究発表 2 (35分)	休憩 (15分)	研究協議・助言 (95分)	閉会	

2 部会

第 1 部会「授業改善」 会場：釧路市生涯学習センター「まなぼつと幣舞」6 階 学習室601

時 間	発 表 内 容	発表機関・発表者
9:20～ 9:55	〈研究発表 1〉 学習指導の改善に関する研究の取組 ～ I C T の効果的な活用の在り方～	石狩教育研修センター 指 導 員 赤 井 輝 人 〃 澤 口 敏 之
9:55～10:30	〈研究発表 2〉 思考力を培う授業づくり ～ 気づき、考え、納得する学びを通して～	釧路教育研究所 研究所員 小 川 周 幸
10:45～12:20	研究協議・助言	
第 1 部会助言者	渡島教育研究所	所 長 細 川 敬太郎 様

【司会・運営者】北海道立教育研究所 研究研修主事 西 岡 裕 英
 【記 録 者】釧路教育研究所 研 究 所 員 樋 口 達 也
 （共同研究推進委員）

第 2 部会「校内研修」 会場：釧路市生涯学習センター「まなぼつと幣舞」6 階 学習室602

時 間	発 表 内 容	発表機関・発表者
9:20～ 9:55	〈研究発表 1〉 校内研修を支援する研究・研修事業 ～ 子どもの学習状況の評価を指導に生かすための 研修の取組～	上川教育研修センター 研 究 員 北 川 真 美 指 導 員 吉 田 明 弘
9:55～10:30	〈研究発表 2〉 思考力・判断力・表現力等を育むための学習活 動の充実 ～ 各教科における学習活動の工夫を通して～	十勝教育研究所 主任所員 辻 尚 美
10:45～12:20	研究協議・助言	
第 2 部会助言者	稚内市教育研究所	所 長 高 井 徳 廣 様

【司会・運営者】北海道立教育研究所 研究研修主事 大 脇 明 子
 【記 録 者】胆振教育研究所 所 員 高 橋 一 仁
 （共同研究推進委員）

第 3 部会「教員研修」 会場：釧路市生涯学習センター「まなぼつと幣舞」7 階 学習室705

時 間	発 表 内 容	発表機関・発表者
9:20～ 9:55	〈研究発表 1〉 若手教員の研修 ～ 教員養成課程における取組と初任段階の研修と の接続～	北海道教育大学 学校・地域教育 研究支援センター へき地教育研 究支援部門 主任センター員 川 前 あゆみ 大学院生 大 路 直 輝
9:55～10:30	〈研究発表 2〉 ミドルリーダーの育成に向けた研修事業の工夫 と成果を普及・啓発する取組	札幌市教育センター 指導主事 高 橋 直 之
10:45～12:20	研究協議・助言	
第 3 部会助言者	空知教育センター	所 長 高 瀬 裕 二 様

【司会・運営者】北海道立教育研究所 企画・研修部主査 俵 谷 俊 彦
 【記 録 者】空知教育センター 所 員 乙 丸 聡 史
 （共同研究推進委員）

第1部会

＜研究発表1＞

学習指導の改善に関する研究の取組

～ICTの効果的な活用の在り方～

石狩教育研修センター

- I 研究について** 社会の情報化の急速な発展に伴い、コンピュータの普及は目を見張る速さで教育現場にも広がっており、「確かな学力」の育成を目指し、情報通信技術を最大限活用した21世紀にふさわしい学びが求められている。

ICTの活用は、一斉学習に加え、個別学習や協働学習における、基礎的・基本的な知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力等や主体的に学習に取り組む態度の育成に有効であると考えられる。

そこで、指導の効果を高める手立てとして、ICT機器の特性を理解し、教材・教具の有効で効果的な活用の在り方を研究し、学習指導の改善を図ることをねらいとした。

- II 研究の内容** 研究仮説「ICT活用の有効性を明らかにし、ICTを活用した授業の工夫・改善をすることにより、児童生徒の意欲や達成感を高め、確かな学力の育成につなげることができる」ことの検証に向けて、8名による研究委員会を構成し、平成24年度より2か年計画で研究を進めている。

- (1) 授業におけるICT活用に関する実態調査

管内小・中学校より各7校を抽出し、アンケート調査を実施する。

- (2) ICTを活用した授業研究

どのようなICT機器の、どのような活用が有効なのかについて理論研究を進め、研究委員によるICTを活用した授業研究を行う。

- (3) 実践事例の紹介と研究成果の現場への環流

研究委員の授業研究や管内の先進的な実践校との連携により、収集した実践例、研究の成果と課題等を研究紀要にまとめ、管内全教職員へ配布する。

- III まとめ・今後に向けて** ICT活用に関する実態調査では、北海道教育大学と連携し、経験年数・担当教科による意識の違いや各教科での具体的な活用場面など、管内におけるICTの活用の実態を把握・分析することができた。

授業研究については、本年度7本の実践を予定している。授業者である研究委員のICT活用技能や実態調査の結果に基づいた授業研究に取り組み、様々な状況に応じた活用事例を紹介できるようにしたい。

昨年度末には、1年次の実践と研究内容をリーフレットにまとめ、管内全教職員へ配布した。本年度は、日常の授業実践や校内研修等で活用できる内容となるよう研究紀要をまとめ、ICT活用を管内へ幅広く呼びかけていきたい。また、道研との連携を図り、ICTの先行的な活用例も紹介していく。

(担当 赤井輝人・澤口敏之)

第1部会

<研究発表2>

思考力を培う授業づくり

～気付き、考え、納得する学びを通して～

釧路教育研究所

- I 研究について** 近年の釧路管内の全国学力・学習状況調査の結果を見ると、全道平均よりさらに低い水準であり、大きな課題となっている。特に、知識・技能を活用して解決するB問題の正答率が低いという実態が見られる。

このような実態の改善を図るためには、各教科で、習得した知識・技能に照らして自分の意見を論述したり説明したりする活動、試行錯誤しながら解決に向けて考え続ける活動を通して思考力を培う必要がある。

そこで、子どもが課題を追究する中で、自ら考える活動を繰り返しながら思考力を培っていく授業を目指し、本研究主題を設定した。

- II 研究の内容** 思考力を培うための手立てとして、「単元構成の工夫」と「学習展開の工夫」という2つの視点で研究を行っている。

まず、単元構成を設定する際、「学びの地図の活用」「見通しと振り返りの充実」「知識・技能の2通りの活用」を位置付け、学習展開においては、1単位時間の授業を構想する際、「発達段階を踏まえた言語活動の設定」「書く活動、話す活動の充実」「子どもの思考する姿を想定した指導」を取り入れている。

研究1年次の昨年度は、単元構成の工夫に焦点をあて研究を進めた。学びの地図を活用することにより、子どもの思考の流れをとらえ、つまづきを想定しやすくなったり、既習事項を活用する場面が明確になり、つながりを把握したりできることが明らかになった。さらに、どのような学びの地図が考えられるのか、よりよい「地図」となるよう試行を重ねた。

見通しと振り返りという視点では、単元導入時に子どもがいかに関心や必要感や学びの見通しをもてるか、単元末に自分の学びはどうだったのか振り返ることができる力を育むことをねらいとして検証を図った。

活用では、習った知識・技能を別の問題に当てはめて解いたり、学んだ結果をまとめて発表したりする単元終末部分のとらえが広がりつつあるが、それだけではなく、既習の学習内容や経験を関係付けて、新しい見方・考え方を発見し、課題を解決していく学習活動も重視し、2通りの活用場面を意図的に単元に組み入れた。

- III まとめ・今後に向けて** 1年次の成果として、児童生徒が学ぶ意味や目的を感じながら学びを広げたり、知識・技能を活用して課題解決したりする姿が見られた。

2年次である本年度は、「学習展開の工夫」に焦点をあて、1単位時間におけるより子どもの具体的な姿にせまった研究を進めていく。また、各教科における思考する姿について明らかにしていきたいと考えている。

(担当 小川 周 幸)

第2部会

＜研究発表1＞

校内研修を支援する研究・研修事業

～子どもの学習状況の評価を指導に生かすための研修の取組～

上川教育研修センター

I 研究について

上川教育研修センターは、「試そう上川の力で、創ろう上川の力で、生かそう上川の力を」を合い言葉に、上川管内23市町村における教育研修の拠点として、管内教職員一人ひとりの専門的知識と実践的指導力の向上に寄与できるよう研究・研修事業を推進している。

本発表では、校内研修に活用できる研究事業と学校や関係機関等の要望に対応する講座開設に関わる研修事業について述べる。

II 研究の内容

「学力の確実な育成を図る指導と評価の在り方～目標達成に向けた授業構築～」を研究主題とし、「指導計画の工夫」「授業展開の工夫」「学習評価の工夫」を研究内容として、理論構築と実践検証の両面から研究を進めている。

当センター研究員の検証授業はもとより、上川管内の研究協力校と連携し実践的に研究を進め、検証授業の公開もしている。2月には、実践発表会という形で成果を発表し、さらに、年度末に研究紀要を発刊・配付することにより研究成果等を管内の各学校に提供し、校内研修を支援している。

校内研修支援としては、次の取組を行っている。

(1) 教育指導研修講座の中に「校内研修」講座を継続開設

「教職員一人一人の役割を明確にし、実践的指導力を高める校内研修の在り方」について研修を深め、校内研修推進のための力量の向上を図ることや校内研修の工夫改善を図る」ことを目的とし、各学校の中堅層を中心に受講を呼びかけている。内容は、精力的に校内研究を進めている学校の研究内容について、当該学校の教員が講師として具体的に提言するとともに、校内研究に基づく研究授業を公開し、「共同研究のよさを生かした校内研究の推進」と「校内研究推進上の課題」についての研究交流を行い、課題解決を図っている。

(2) 学校等のニーズに応える「出前講座」の継続開設

「今日的な教育課題」「教科等指導」「小学校外国語活動」「各種実技指導」「生徒指導」「特別支援教育」「パソコン実技」等各学校の課題に対応するため、管内の専門的知識を兼ね備えた教職員等に講師を依頼し、「出前講座」を実施している。平成25年度は、「TT指導」「キャリア教育」「ICTの活用」「学力向上と小中連携」「版画指導」「書写指導」等多岐の依頼に対応している。

III まとめ・今後に向けて

研究事業・研修事業を広く周知できるよう、Webページや「研修センターだより」を発行し、情報発信している。時代のニーズ、教職員のニーズに応じて内容の改善と充実を図りながら、教職員のネットワークを広げ、管内各学校の「生きる力」を育む教育活動の充実を支援していきたい。

(担当 北 川 真 美)

第2部会

＜研究発表2＞ 思考力・判断力・表現力等を育むための学習活動の充実

～各教科における学習活動の工夫を通して～

十勝教育研究所

I 研究について 教育基本法・学校教育法の改正において、教育の目標・義務教育の目標が定められるとともに学力の三要素が明記され、これを踏まえ学習指導要領の改訂が行われた。

また、学力に関する各種調査の結果から、北海道においては、基礎的・基本的な知識・技能の習得に課題があるとともに、全国の傾向と同じく、基礎的・基本的な知識・技能を活用し、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等にも課題があることが分かった。

そこで本研究では、習得した基礎的・基本的な知識・技能を活用し、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育むための思考や判断する場面を取り入れた学習活動に焦点を当て、本主題を設定した。

II 研究の内容 本研究では、中央教育審議会答申に示されている、思考力・判断力・表現力等を育む学習活動例を基に、子どもたちや各学校の実態、教科の内容等に合わせて、子どもたちが主体的に考えを整理し深めていけるよう学習活動を工夫した。

1年次では、問題提示や教材の工夫が子どもの多様な考えを生み出し、考えを整理し深めていく学習過程の工夫が思考力・判断力・表現力等を育むことにつながるという成果を挙げることができた。

一方、学習状況を把握するための評価の工夫が必要であるという課題も明らかとなった。

そこで2年次では、考えを整理し深めていく学習活動を更に充実させるために、2つの視点から研究を進めた。

(1) 学びを実感し伝え合う学習活動

- 一単位時間を通して学びの実感を伴わせる工夫
- 自分や集団の考えを深めていく協同的な学び合いの工夫

(2) 学びを改善するための指導と評価

- 授業の中における評価規準と評価場面
- 指導に生かす、的確かつ効率的な評価

III まとめ・今後に向けて 学びの実感を伴わせる工夫や協同的な学び合いが、子どもの主体性を生み、見取るポイントを明確にした指導と評価の改善が、より確実な理解につながった。それらの工夫が、子どもの考えを整理し深めていく学習活動を充実させ、思考力・判断力・表現力等を育むことができたと考える。

(担当 辻 尚 美)

第3部会

<研究発表1>

若手教員の研修

～教員養成課程における取組と初任段階の研修との接続～

北海道教育大学 学校・地域教育研究支援センター

へき地教育研究支援部門

I 体験実習のねらい へき地校体験実習は、へき地小規模校教育の特色である「複式による指導」や「少人数指導」、「異学年交流」などの学習指導と、「教師と児童生徒との密接な信頼関係」、「地域と連携した学校経営」等を実地で体験する取組である。一般的な教員養成段階における学修を積み重ねると同時に、北海道に多いへき地小規模校において必要な教師としての実践力を培う取組である。へき地校体験実習は教員養成段階でのオプション実習としてカリキュラムに位置付けている。

II 体験実習の内容 へき地校体験実習Ⅰ（2年生を中心とした1週間の実習）の内容は、子ども理解を中心とした観察実習であるが、可能な場合は教壇実習も行っている。また、時期的にも地域行事が盛んな8月から9月が実習期間であるため、多くの実習生は地域の行事にも参加する機会を得て、学校と地域が一体となったへき地小規模校の活動を体験することができる。

釧路校のへき地校体験実習Ⅱ（主免実習を修了した3～4年生対象の2週間の実習）の内容は、複式学級や少人数学級における指導方法について、授業実践を通して理解を深めている。

へき地校体験実習Ⅰの年間計画は、右囲みのとおりである。

【へき地校 体験実習Ⅰ】

4月	実習生募集ガイダンス 実習生募集受付・選考個人面接
5月	実習生確定・実習オリエンテーション
6月～7月	全体事前指導・個別指導
8月	実習校ごとの実習直前指導
8月～9月	1週間現地に滞在して実習を行う
9月～11月	実習校ごとの事後指導 実習手帳の整理・総括レポートの作成
12月	学内実習報告会の開催

III まとめ・今後に向けて 試行期の平成17年度を含む平成24年度までで、受講学生数は延べ1,020名を数える。実習生事後アンケートでは、学生時代に複式教育を学ぶ重要性の理解や、へき地小規模校での教育実践の経験が、教職を目指す意欲を高める契機となっていることが明らかになっている。また、受け入れ側の学校からは、児童生徒への教育効果があることや、教員自身が実習生への指導や研究授業を通して授業づくりなどの研修の機会につながるという声も聞かれる。今後も学校や教育行政と連携を強め、へき地小規模校教育への理解を深めるための実習となるように、大学センター部門としても推進していきたい。

（担当 川 前 あゆみ・大 路 直 輝）

第3部会

<研究発表2>

ミドルリーダーの育成に向けた 研修事業の工夫と成果を普及・啓発する取組

札幌市教育センター

I 教員研修のねらい 当教育センターでは、ミドルリーダーの育成に向けた研修として、『教職経験者研究協議会Ⅱ（15年経験者研修）』『専門研修（中堅教員研修コース）』『学校運営研修会』『新任主幹教諭研修』を実施している。

それぞれの研修については、以下のことをねらいとしている。

- ・『教職経験者研究協議会Ⅱ（15年経験者研修）』…教科・生徒指導、学年・学級経営等に関する専門性や実践力を高めるとともに、校内における校務運営の中心的な役割を果たす教員として、全校的な視野に立って指導力を発揮できるよう、学校経営に関わる資質の向上を図る。
- ・『専門研修（中堅教員研修コース）』…教職経験20年程度の教諭を対象とし、学校マネジメントに関わる諸課題及び教養的事項について研修を深め、ミドルリーダーとしての資質の向上を図る。
- ・『学校運営研修会』…教務・研修を推進する教員に対し、教育計画、学校運営等に関する研修を行い、学校教育の充実に資する。
- ・『新任主幹教諭研修』…新任の主幹教諭に対してその職責や今日的な教育課題等に関する研修を行い、資質や能力の向上を図る。

II 研修事業の内容 『教職経験者研究協議会Ⅱ（15年経験者研修）』は、共通研修と選択研修で構成している。共通研修では、中堅教員の役割に関する講話の他、「学ぶ力を育成する教育課程の在り方」をはじめとする5つのテーマ別部会によるグループ交流・発表を行っている。選択研修は教育委員会が指定した講座の中から2講座以上を受講することとしている。『専門研修（中堅教員研修コース）』は、受講を希望する教員を対象とし、自己啓発と人材育成に関わる内容や特別支援教育やいじめへの対応に関わる内容の講座を実施している。『学校運営研修会』は、「学校教育における今日的課題」と題した講話、「教育課程の編成と実施」についての協議、「教務に関する実務と課題」「ミドルリーダーとしての役割について」の講義・演習等を行っている。『新任主幹教諭研修』は、主幹教諭の職務と役割等に関する講義、主幹教諭の実務に関するグループ協議等を実施している。

III まとめ・今後に向けて 上記の研修成果を普及・啓発する取組については、受講者による所属校の校内研修での報告などによって行われている。今後も広報活動等を通して、学校づくりに主体的に参画する意識をもって、専門性や実践力を高めようと自己研鑽に励む教員の姿を積極的に伝え広めていきたい。

（担当 高橋 直之）

資料3 大会役員一覧

大会長	岸 豊	北海道教育研究所連盟委員長 (北海道立教育研究所長)
副大会長	大友 裕之	北海道教育研究所連盟副委員長 (札幌市教育センター所長)
	常田 拓孝	北海道教育研究所連盟副委員長 (石狩教育研修センター所長)

【北海道教育研究所連盟事務局】

事務局 長	北 林 靖市郎	(北海道立教育研究所企画・研修部長)
事務局 次長	渡 邊 直 樹	(北海道立教育研究所企画・研修部研究主幹)
〃	大 野 敬	(北海道立教育研究所総務部事業課長)
事務局 員	俵 谷 俊 彦	(北海道立教育研究所企画・研修部主査)
〃	村 上 志保子	(北海道立教育研究所総務部事業課主査)
〃	長 浦 紀 華	(北海道立教育研究所企画・研修部研究研修主事)
〃	大 脇 明 子	(北海道立教育研究所企画・研修部研究研修主事)
〃	西 岡 裕 英	(北海道立教育研究所企画・研修部研究研修主事)
〃	山 田 圭 介	(北海道立教育研究所企画・研修部研究研修主事)

【運営委員会】

委員長	渡 辺 仁 平	(釧路教育研究所長)
副委員長	荻 原 崇 弘	(釧路教育研究所副所長)
〃	坂 東 薫	(釧路教育研究所副所長)
事務局 長	大 西 展 史	(釧路教育研究所事務局長)
事務局 次長	黒 萩 徳 樹	(釧路教育研究所事務局長)
総 務 部	樋 口 達 也	(釧路教育研究所所員)
〃	堀 幸 一	(釧路教育研究所所員)
〃	藏 光 貴 弘	(釧路教育研究所所員)
〃	長 谷 川 保 子	(釧路教育研究所事務員)
会 場 部	松 岡 優 徳	(釧路教育研究所所員)
〃	岡 田 真 亮	(釧路教育研究所所員)
〃	谷 口 亮	(釧路教育研究所所員)
〃	守 屋 幸 司	(釧路教育研究所所員)
〃	山 崎 誠	(釧路教育研究所所員)
〃	近 藤 大 知	(釧路教育研究所所員)
〃	和 田 繁 繁	(釧路教育研究所所員)
研 究 部	小 川 周 幸	(釧路教育研究所所員)
〃	石 井 宏 幸	(釧路教育研究所所員)
〃	中 島 雅 人	(釧路教育研究所所員)
庶 務 部	富 田 義 宏	(釧路市教育委員会指導主事)
〃	齊 藤 崇 潤	(釧路市教育委員会指導主事)
〃	渡 部 理 砂	(釧路教育研究センター研究所所員)
〃	蓮 井 悟 之	(釧路教育研究センター研究所所員)
〃	渡 邊 悟 之	(釧路教育研究センター研究所所員)
〃	松 本 孝 也	(釧路教育研究センター研究所所員)
〃	畠 山 和 彦	(釧路教育研究センター研究所所員)
〃	千 田 充	(釧路教育研究センター研究所所員)

【平成25年度共同研究推進委員会】

委員長	駒 場 秀 剛	(後志教育研修センター研修部長)
副委員長	西 岡 裕 英	(北海道立教育研究所企画・研修部研究研修主事)
委 員	杉 原 大 樹	(石狩教育研修センター指導員)
〃	乙 丸 聡 史	(空知教育センター所員)
〃	青 木 賢 二	(上川教育研修センター研究員)
〃	高 橋 一 仁	(胆振教育研究所所員)
〃	阿 部 昌 己	(十勝教育研究所所員)
〃	樋 口 達 也	(釧路教育研究所所員)
〃	高 橋 直 之	(札幌市教育センター研修担当課指導主事)
〃	篠 原 寛 之	(岩見沢市立教育研究所所員)
〃	川 前 あゆみ	(北海道教育大学 学校・地域教育研究支援センター へき地教育研究支援部門 主任センター員)
〃	大 脇 明 子	(北海道立教育研究所企画・研修部研究研修主事)

北海道教育研究所連盟 平成25年度共同研究集録
「実践的な指導力の向上を図る教員研修の充実」
平成26年3月発行

編 集 北海道教育研究所連盟事務局
〒069-0834 北海道江別市文京台東町42番地
電 話 011-386-4512
F A X 011-386-4988
E-mail dokenren@hokkaido-c.ed.jp

発 行 北海道教育研究所連盟